沙羅の樹文庫だより

NO. 202（23 年 9 月号）

月の砂漠を　はるばると
旅の駱駝が行きました・・・・・・
さきの鞍には　王子様
あとの鞍には　お姫様・・・・・・

南房総・御宿海岸にて　23.9.1

江ノ島・岩本楼
ローマン風呂
23.9.7
（国有形文化財

本年も３密を避け予約制で開館しています

2023 年

9 月 16 日（土）、17 日（日）
10 月 14 日（土）、15 日（日）
11 月 18 日（土）、19 日（日）
12 月 16 日（土）、17 日（日）
★12 月 17 日午前はクリスマス会★

来 24 年の開館日も従来通り、
第３日曜日と前日の土曜日

1 月 20 日（土）、21 日（日）
2 月 17 日（土）、18 日（日）
3 月 16 日（土）、17 日（日）
・・・・・・・・・

文庫・開館時間：土曜日 13：00～17:00
日曜日 10：00～15:00

子どものための読み聞かせ・おはなし会
文庫のある日曜日１０：３０～１１：００

おはなし沙羅・おはなし勉強会
文庫のある土曜日１０：３０～１２：３０

沙羅の樹文庫
〒413-0235 伊東市大室高原 7-122
☎0557-51-3737（090-6039-3782）

沙羅の樹分館ゆるかの里子ども文庫
〒413-0232　伊東市八幡野 924-1
☎0557-54-1910
開室日：水曜日 13:00～15:00
：日曜日 10:00～15:00

23.9.10 台風の合間・雲たなびく富士（富士駅より仰ぐ）

文庫あれこれ◆全く久しぶりに、ちょい旅に出ました。アクアラインを通って南房州へ。千葉は、昨年グランピングに養老渓谷へ出かけて以来。観光なしの我らには、４泊５日（木曜仕事帰りに出て月曜仕事に間に合うよう、朝帰る）で、近距離（千倉―御宿―勝浦―千倉）だと、チェックインまでの時間潰しが大変です。ましてや９月に入るとは言え、灼熱地獄。大好きな海を眺めて・・・、とはいきません。でも、行きに寄ったローズマリーフラワーガーデン（道の駅）では、地元の新米ほか、東京では見かけない野菜や果物を目にし、御宿では昼ではありましたが、「月の砂漠」を懐かしみました。◆けれど、孫たちに我が名作？（表紙の写真）をラインしたら、月の砂漠の歌を誰も知りませんでした。ああ・・・。音楽の時間では、どんな歌を教えているのでしょう。◆でも最後に戻った千倉では、浜辺の四阿で潮風に吹かれながら、いい時を過ごし、連れ合いは海に入り泳ぎました。◆のんびりまったりした数日だったのに、80 にもなると旅は疲れる疲れると言い合いながら帰りました（私は運転もせず楽チンだったのですが）。◆にも拘わらず、またこの週末、今度は東海道電車旅。台風が来るのも何のその、川崎から藤沢経由江ノ島（何と２人とも島内に入るのは初めて!）、古い宿に泊まり、居酒屋で釜揚げしらす丼とかき揚げ丼を食べ、２日目は小津安二郎縁りの茅ヶ崎館泊、美術館での小津関係の展示会をスルーして、ちょびちょび電車を乗り継いで生きのいいイワシを食べに清水へ（イワシフルコースも時化で生イワシ無し）。でも帰りに富士駅から見事な富士山（←の写真）が!!◆今月寄せていただいたお便りは、イギリスの旅と韓国への旅です。行きたいなあ❣□◆新学期も始まって子どもたち来てくれますように。◆この月末お月見（中秋の名月）、できるでしょうか。（西村）

（ピンクの夾竹桃が風に揺れる。向かいは小津さんの部屋とか）

コロナ明け、イギリスに出かけた 上 ―まずは、緑を楽しむ― 代田　みち子

「英語ができない、英語は苦手」というのが口癖の娘が、8 年前ケンブリッジ大学に在籍した。卒業し、更に今ポストドクターとして研究を許され、講座も担当している。「私は中学で英語を始める時、アルファベットが全部わからなかった」という。子ども時代は短い！大いに遊べ！との教えを素直に実践した子だった。仲間たちより遅れ、遠回りし、その後幸運に恵まれ人に助けられ、文化人類学（オーラルヒストリー）分野を歩いて 30 代半ば。その娘がいるイギリスに久々に出かけた。夫は娘がいてもヨーロッパは遠すぎると言って行かなかった。

英国は EU 離脱後物価が上がり、ウクライナ戦争の影響もあり、すべての物が高い！低いのは気温だけ。7 月後半はず～っと 14℃～24℃。猛暑の日本に比べ、涼しくてホッとした。

Royal Botanic Gardens, Kew

ロンドンに着くと必ず訪ねたいのが Kew（キュー）王立植物園（通称キューガーデン）。ヒースロー空港の近くにあり世界で最も大きい、最も多くの種を集めている植物園。園内トレインで子どもの気分になりぐるっと見た後、季節により好きな場所を観る。秋でも紅葉より緑が多く、さすがに緑の厚化粧の国だ。

今回、ボタニカルアート館では、西欧の二人の画家の絵があり、牧野富太郎の絵かと思うほど、似ている作品が出ていた。

日本では「ジョウロウホトトギス」とよばれているもの、国を超えて魅力に思うものは同じようだ。

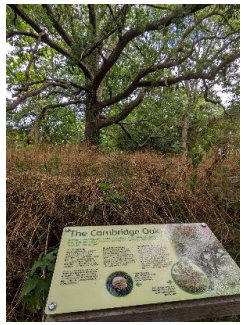
コロナ明け４年ぶりのロンドンの街を親子で巡ってみた。国会議事堂を兼ねるビッグベンはしばらく修復中だったが、化粧後ずいぶん明るい色となり、周辺はマスク無しの多くの観光客であふれていた。

近年できた空中庭園がある民間ビルの 38 階へも上がった。緑の庭園からロンドンの街を見下ろす。景色は別格！見学無料というのがイイが、予約しないと入れない。すぐ下をテムズ川が流れ、ロンドン橋やロンドンタワーがはるか下に小さく見える。近年この空中から見る景色が多くの人気を得ているらしい。

その後ロンドンの喧騒を離れて電車で 40 分、ケンブリッジの街に着く。こちらは静かな静かな大学街。ケム川を挟んで街並みや緑の芝生が広がり、ケンブリッジ大学の各カレッジが続く。

この大学街にも中心部に植物園がある。ケンブリッジ大学ボタニックガーデン。年中無休。

大学の植物園なので進化が学べるコーナーとか、世界中の絶滅危惧種の植栽とか、教育研究機関でもあるようだ。NHK 朝ドラ『らんまん』にも戸隠（トガクシ）草の折、ケンブリッジの名前が出てきた。市民の憩いの場でもあるらしく、老若男女いろんな人々が楽しんでいる植物園だ。広い園内を、私は杖持参で、休み休み歩いた。　　2023．7 月



Cambridge University Botanic Garden

23.9 月に入る子どもの本

絵　本

『へっこ　ぷっと たれた』（こがようこ構成・文 降矢なな絵　童心社 2018）ID13953.
『まゆとおにーやまんばのむすめ　まゆのおはなし』（富安陽子文　　福音館書店 2004）ID13954.
『まゆとりゅうーやまんばのむすめ　まゆのおはなし』（富安陽子文　福音館書店 2008）ID13955
『まゆとかっぱーやまんばのむすめ　まゆのおはなし』（富安陽子文　　福音館書店 2018）ID13956
『バラになったのぞみ』（おがわるり文　かとうゆうみ絵　熊日出版）ID13957
『あいうえおのうみで』（すぎはらともこ作・絵　徳間書店 2012）ID13958

『すんだことはすんだこと』（ワンダ・ガアグ再話・え. 佐々木マキやく　福音館書店 1991）ID13960
『しごとをとりかえただんなさんーノルウェーの昔話』（ウィリアム・ウィースナーえ　あきのしょういちろうやく　童話館出版 2007）ID13961

『しょうぼうねこ』（エスター・アベリル作　藤田圭雄訳　文化出版局 1974）ID13959
『よるのねこ』（ダーロフ・イプカー文と絵　光吉夏弥訳　大日本図書 1988）ID13962
『バレエ団のねこピンキー』（ノエル・ストレトフィールド作　スザンヌ・スーパー絵　田中潤子訳　のら書店 2023）ID13963

読みもの

『草の背中』（吉田道子著　あすなろ書房 2023）ID13964
『キキに出会った人びと（魔女の宅急便　特別編その１）』（角野栄子作　佐竹美保画　福音館書店 2016）ID13965　　『キキとジジ（魔女の宅急便　特別編その２）』（角野栄子作　佐竹美保画　福音館書店 2017）ID13966　　『ケケと半分魔女（魔女の宅急便　特別編その 3）』（角野栄子作　佐竹美保画　福音館書店 2022）ID13967

『ポリッセーナの冒険』（ビアンカ・ピッツォルノ作 クェンティン・ブレイク絵　長野徹やく徳間書店 2004）ID13968
『緋色の皇女アンナ』（トレーシー・バレット作　山内智恵子訳　徳間書店 2001）ID13969.
『起業家フェリックスは 12 歳』（アンドリュー・ノリス著 千葉茂樹訳 あすなろ書房 2023）ID13971
『星が導く旅のはてに』（スーザン・フレッチャー作 冨永星訳　徳間書店 2010）ID13972
『このすばらしきスナーグの国』（E.A.ワイク=スミス原作　ヴェロニカ・コッサンテリ作　野口絵美訳 徳間書店 2023）ID13970

23.9 月に入る大人の本

フィクション

『この夏の星を見る』（辻村美月著　角川書店 2023）ID19076
『うるうの朝顔』（水庭れん著　講談社 2023）ID19077
『水車小屋のネネ』（津村記久子著　毎日新聞出版 2023）ID19078
『百年の子』（古内一絵著　小学館 2023）ID19079
『墨のゆらめき』（三浦しをん著　新潮社 2023）ID19080
『透明な夜の香り』（千早茜著　集英社 2020）ID19081
『あわいに開かれて』（小野正嗣著　毎日新聞出版 2023）ID19086

『信長の遺書―マキアヴェリ　チェーザレ・ボルジア御留書』（山本音也著　小学館）ID19082
『公孫龍　巻３　白龍篇』（宮城谷昌光著　新潮社 2023）ID19083
『霜月記』（砂原浩太朗著　講談社 2023）ID19084
『パシヨン』（川越宗一著　PHP 研究所 2023）ID19085
『ふりさけみれば 上巻』（安部龍太郎著　日本経済新聞出版社 2023）ID19091　『ふりさけみれば 下巻』ID19092

『ガラスの帽子』（ナヴァ・セメル著　樋口範子訳 東宣出版 2023）ID19087
『ルクレツィアの肖像』（マギー・オファーレル著 小竹由美子訳　新潮社 2023）ID19088

エッセイほか

『モンパルナス 1934』（村井邦彦✖□吉田俊宏著 blueprint2023）ID19089
『日本で軍事を語るということ―軍事分析入門』（高橋杉雄著　中央公論新社）ID19090
『戦国日本を見た中国人―海の物語『日本一鑑』を読む』（上田信著　講談社 2923）ID19093

文　庫

『神様の暇つぶし』（千早茜著　文春文庫 2022）ID19097
『説経節　俊徳丸・小栗判官他３篇』（兵藤裕己編注　岩波文庫 2023）ID19098
『卒業生には向かない真実』（ホリー・ジャクソン著 服部京子訳　創元推理文庫 2023）ID19099

新　書

『職業としての編集者』（吉野源三郎著　岩波新書 1989）ID19094
『ケルトの世界―神話と歴史のあいだ』（疋田隆康著 ちくま新書 2022）ID19095
『未完の天才　南方熊楠』（志村真幸著　講談社現代新書 2023）ID19096

痛い腰で、あ・ち・こ・ち　ソウル

菊地　芙美子

韓国は一番近い外国なのに、海外旅行といえば、遠い国にしか目が向いていなかった。それに、なんとなく訪問をためらう年代(夫 86 歳、私 85 歳)でもあったから。 ――――――

娘夫婦(ソウルマラソン常連)が「行こう!」と、声をかけてくれたので、「歩けるうちに」と、痛めた腰が回復しないのに、「なんとかなるさ」、と出かけたのです。

1 日目(7/22)晴れ

ソウル王朝 500 年の歴史が始まった故宮、**光化門**から **景福門**へ。ここは風水上「良い気」の集まるスポットでもあるので「気」をもらって、昔の街並みが 残る**北村韓屋村**へ足を伸ばす。 路地脇にトッケビの石版を見つけた。 私にとっては「間抜けなトッケビ」 の昔話だが、今の人は韓流ドラマを連想するらしい。**仁寺洞**の商店街を見るだけショッピングして、明洞の路地を入った「イエジ粉食」で、チジミ、ビビンバ、お粥を注文、小鉢に数種類のおかずも出た。分け合って食べたけど、どれも口にあって美味しかった。

ホテルに帰って歩数計を見たら 1 万 7 千歩、腰にコルセット、湿布ペタペタで窮 屈だったけれど上出来だ!

2 日目(7/23)雨

朝食予定の益善洞のミルトーストは、タクシーで 8 時過ぎに駆けつけたのに、すでに長い行列。45 分待ってやっと着席。藤井聡太くん似のお兄さんが、セイロで蒸すパンは熱々でもっちり。 お 味は? 雰囲気で食べるのね。

地下鉄で漢河を渡り、**大型モール“コエックス”**へ。1F 広場の巨大図書館に圧倒された。 下から上まで本がぎっしり。でも、読める本は 1 冊もなかった。

漢陽都城を守る 4 大門の 1 つ勇壮な**東大門**に立ち寄ってから、屋台が密集するグルメ横丁**広蔵市場**で空腹を満たす。相席になった年配の二人連れのおじさんがチヂミ(鹿肉)を差し入れてくれた。

お 礼 を 言 え た !「カムサハムニダ」。市場に並んだ料理と人びとの活気に、「食べることは 生 きること」と実感。 鶏肉嫌いの夫に付き合い、タッカンマリも参鶏湯も食べなかったのが心残り。

3 日目(7/24)晴れ時々曇り

漢河の南側は近代的な街、高層高級マンションが群立し、韓流スターも住んでいるらしい。 **オ リンピックスタジアム**を散策してから、昨年事故のあった**梨泰院**へ。傾斜の緩い、狭い短い坂道で、たくさんの犠牲が出たことが信じられない。壁に貼られた犠牲者の名前の紙片に黙祷する。

4 日目最終日(7/25)晴れ時々曇り

4 連泊したホテルは、ソウル広場、支庁舎　向かいで、右隣にロッテホテルとデパートが並んでいる。広場の先の徳寿院に沿って続く石垣の道は、歴史を感じさせる雰囲気が気持ちを落ち着かせてくれる。

南大門（国宝）から坂道を登って南山公園の城壁沿いに、ソウルタワ 一の足元まで登った。素晴らしい見晴しと心地よい風。毎日 2 万歩近く歩いたけれど、腰はなんとか持ちこたえた。

⇨ソウルタワー

滞在中毎日通ったホテル隣のデパ地 下 は、お抱え食堂みたいに、食べたり、テイクアウトしたりしたが、 最後の買い物も夫々好みのキンパ。空港でお腹に収めて、思い残すことなく「アンニョンヒゲサヨ」。

帰宅してから、ずっと気になっていた茨城のり子の詩「あの人の棲む国」（寄りかからず）を読み返して思う。実際に自分の目で見、確かめ、感じて、お隣の国への先入観が取り除けたことが、この旅での収穫だった。

（終）

徒然なるままに・・・　（さ・ら）

★暑い夏でした。東京の家では冷房をつけっぱなしで、その涼しい中でゴロゴロ・・・。この夏こそ、足の踏み場もない２階の部屋の衣類や本棚、アルバムを整理する筈が。あなたは死ぬまで片付けられないでしょうよ、と言う連れ合いも、気の毒に、自分が寝に帰る家（私が住まう家から６０メートル先）の全館空調が夏に入って途端に壊れ、修理の部品なしとて、猛暑の中、意地張って窓開けて寝ていましたが、ついにちょい旅再開!(私ラッキー)。★伊豆の会員さんは、都会より幾分暑さを逃れているでしょうが、珈琲店をやっている友人、暑い夏の間だけ、避暑がてら別荘でお店を開くとか。これまた面白い試み❣★豪雨、台風の被害を受けた方々も大変（高見の見物のようですみません)、と思っていたら、モロッコ・マラケシュで大地震、リビアで大洪水、次々に自然災害。私とのちょい旅だけでなく人生、旅が日常のような連れ合い、僕が行くところは、みんな自然災害に遭う、と。地球全体、本当に私たちは生活を根本から考え直さねばならないのでしょう・・・。と、言いつつ、相変わらず空調を頼りにしているダメ私です。秋よ来い、早く来い❣